

志賀：初めて里子ちゃん受けようと思ったのっていつ？

茜さん：まず研修っていうのがあって、それを受けて認定が通ったら初めて里親として自治体に登録される。

志賀：どれぐらい勉強するの？

茜さん：3日だよ。里親制度についてとか、里親になる心構えとか、里子によくある問題行動とその対処法とか、児童心理とか専門的なことも教えてくれる。里子特有の話もちろんあるんだけど、子育て全般に当てはまる話も沢山あって、この研修は全国民が受けたらいいんじゃないかって思うような内容だったよ。

私も1人目産む前に受けたかった！！って思ったもん。私は秋頃に研修受けて、認定を受けたのが翌年春。認定されました〜って連絡があってから、本当にすぐに兎相から電話がかかってきて、最初の里子を預かることになった。急に連絡が来ることがあるとは聞いてたけど、本当に急で面食らったね。心構えが〜！って思ったけど、すぐに心構えなんてどーでもいいか、ってなったけど。事前に何回も面会して適性を見るとか、委託まで時間をかける場合も多いみたいなんだけど、うちは年齢的なこともあって、何の準備もなくいきなりって感じだった。

久保田さん：すぐだったね。

茜さん：最初の話だと委託期間はヶ月くらいって言われたかな。それがちょっと延びたんだよね。最初はまあ2、3ヶ月ぐらいじゃそれほど愛着わかんだろうと思ってたんだけど、3日ぐらいでもう、いなくなるの嫌だな〜ってくらい愛着わいてた。まだ赤ちゃんだったから、可愛過ぎて。うちの90過ぎの祖母がめっちゃくちゃ可愛がって、1日中リビングのソファに座って赤ちゃん見てたわ。その子がまた超大人しい子で、ミルクさえやってりやらずと寝てるような子だった。起きてても泣かないでキョトンとしてる。赤ちゃんの姿が見えないとすぐ「あの子はどこ行った」って。おばあちゃんほら、いるよいるよって、見せてあげて。でも泣くと速攻呼ばれただけど私。泣いてるぞつつて。大人しい間はずっと眺めてる。眺めるだけで世話はしないけど。

志賀：泣いてるって言うてくれるだけでありがたいよね。

茜さん：そうそう、おばあちゃんは自分の一人娘（母）がめっちゃ大人しい子だったから、大人しい子が好きで。うちの子らとかむしろ嫌い、笑 婆ちゃん機嫌悪くなるからお前ら静かにしとけみたいなの。だからこの大人しい赤ちゃんとの相性が最高だった。

志賀：わはは。いろいろ条件合致した。笑

茜さん：そんなわけで、ばあちゃんが一番癒されてたわ。寿命が10年は伸びたね。

志賀：そういえば、里子を受け入れた間に、船舶免許とってたよね？

茜さん：船舶免許は誰でも2日で取れるから。しかも船舶免許を取って以来、船運転してない。海なら船だろ！ってノリでとりあえず取ってみた。釣りもしないからね私。

志賀：船舶の免許の写真が送られてきた時には、かなりビビったよ。笑 今、長女の瑩良が今の里子ちゃんの面倒を、すごく見てるんでしょ？

茜さん：めっちゃ見てる。

志賀：里子ちゃんは、今で3人目？

茜さん：2人目。その大人しい赤ちゃんを実親さんにお返しして結構すぐ2人目が来た。

佐藤：返した赤ちゃんとはまた会えるの？

茜さん：そこは一切ダメです。一切連絡は取れない。

佐藤：取っちゃダメなんだ。

茜さん：実親とのやりとりは一切なかった。

佐藤：今後また会いましょうってのはできないんだ。

久保
来た

小型船舶操縦免許
Permit of Boat's Operation



氏名 久保
Name Kubo
昭和
Date
本籍 東京
住所 愛知

) あ、この猫も急い
か。



茜さん：今の里子ちゃんとは実親さんと直接連絡取れているから、すごく稀なケース。例えば親から無理やり引き離したようなパターンだと、里親の所に怒鳴り込んでくる可能性もあるしね。1人目の赤ちゃんの場合はそこまでのケースではないんだけど。

佐藤：ちょっとグレーゾーンかもしれない、色んなパターンが考えられるもんね。

茜さん：子どもの実親の家庭環境をどこまで里親に開示するかっていうのも、自治体によって全く違うみたい。全然教えてくれないみたいなのもあるらしいんだけど、愛媛は可能な限り丁寧に教えてくれる。そっちの方が里親としてはすごくありがたい。その子が育ってきた環境知らないと、やっぱりね、どういうトラウマを抱えてるかみたいなのも全然わからんから。

例えば虐待受けてた子とかには、大きな声出したりとかダメだったりとかっていうのもあるし、それによって対処の仕方が違ってくる。最初の子はほとんど外の世界を知らない子だったから、島に来たら、色んな自然を見せてやろうと思ってね。ちょうど春ですごい気持ちがいいときだったから、庭でお昼寝させたり、海とかお花とかたくさん見せてあげた。

志賀：5ヶ月で帰ってっただね。

茜さん：そうだね。実際に返す時は、もう二度と会えないって現実が残酷だなって思った。

志賀：そうか・・・そうだよな。

茜さん：だって一時的とはいえ、自分の子供のように大切に育てた子と、はい今日から一生会えませんみたいな、そんなことってある？親戚の子を預かってとかなら、全然会えるのに、制度ってすげえ残酷だな！と思った。今回は赤ちゃんだからね、本人は私のことなんてすぐ忘れるからまだいいんだけど、子供だってある程度育ったら、育ててくれた親にも会いたいって気持ちもあるだろうし。それ考えたら、子どもも傷つくんじゃないかって思うよね。里子自身が成人になったら、自分の意思で育ての親を探す手段も無いわけじゃないらしいけど。

志賀：あれ、18歳じゃないのかな。

茜さん：里親制度ってのは原則として18歳までなの。実際に、0歳から18歳まで育てたみたいなの里親さんもいる。もうそうだったら実の親子だよな、絆としては。でもこれ海外だったらね、そんな0歳から18歳まで里親が預かるってのはありえんよ。そこまで子育てできない実親の親権なんて、すぐ奪えるわけ。でも日本はなぜか実親の権利がめちゃくちゃ強い。育てられないけど、実親の権利は手放さないっていう親がたくさんいる。それって子どもの為になってるの？って大いに疑問だよな。

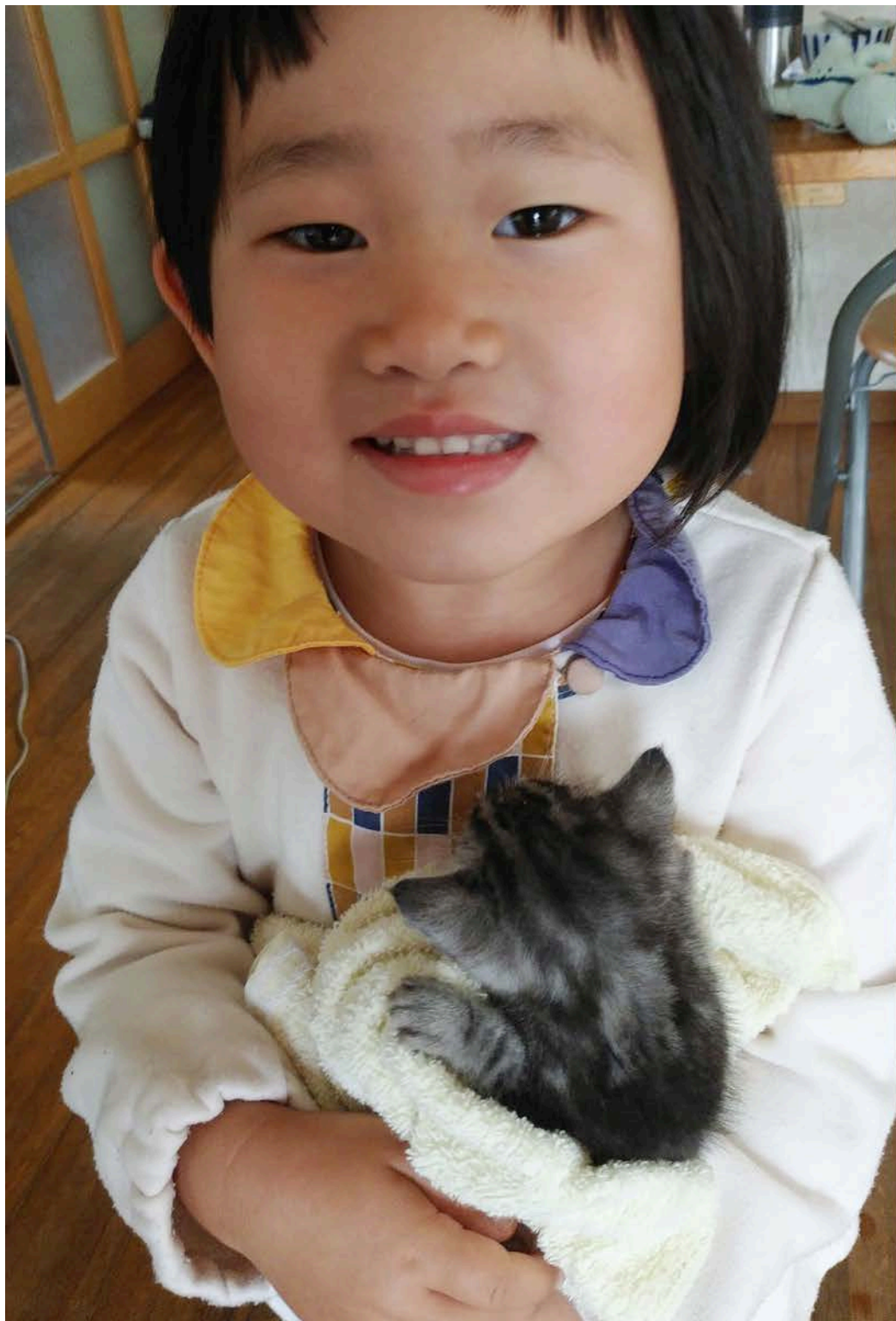
志賀：それは今、すごく問題になってるね。

佐藤：近年、親や親の恋人からの虐待で子供が亡くなる事件あるよね、もちろん親の権利があるから、保護するタイミングや期間とかも含め児相は判断難しいよね。

茜さん：ニュースになるとすぐ児相の落ち度だって叩かれるけど、現実には制度とか法律が追いついてない部分が多い。そこは今後変わっていくべきだし、国際的にも非難されてるから。逆にアメリカとかもね、安易に子供と親を引き離してしまう事例もあるしね。それはそれで、ちゃんとした親子関係が保てなくなったり。でもその虐待した親にも、しっかり更生プログラムがあったりするけど、日本はそういうのもまだまだ遅れている印象がある。里親やっていると、子供を保護するって本当に表層的なことだけなんだなって気づかされる。

本当にサポートしなきゃいけないのは親の方だったりするから。親自体が貧困だったり、過去に虐待を受けてたり、ひどい家庭環境で育ってることも多い。まずそこ改善しなかったら、子どもも返せんやろと思うけど、児相はそこにコミットする力がとても弱い。親に対するサポート体制がもっと整わないと、子どもの擁護に繋がらないよね。

久保田さん：（写真を見ながら）あ、この猫も急にうちに来たよね。拾ってきたっていうか。



茜さん：捨てられてたのよ、うちの前に。

久保田さん：近所の誰かが、段ボールに入れて育ててくれて置いてったわけでしょ。

茜さん：うちって大家族で、家に必ず誰かいるし、この前も側溝で脚折れた犬がいるって家に担ぎ込まれて。連れてきた人は仕事があるからすいません！って。もうウチは駆け込み寺ですかみたいな感じで。

志賀：アジュールだ・・・機能してる。

久保田さん：この猫は結局すでに衰弱してて、すぐ死んじゃったんだけど。

茜さん：とりあえず何か1匹、2匹、2人、3人増えてもあんま変わらないだろぐらいな感じで思われてるよね。でも私自身も、社会の中にそういう駆け込み寺みたいなものがあるっていうことが、いかに大事かってすごく感じる。うちみたいに、いろんな人がいて、いろんな世代がいて、若者もいれば、年寄りもいるし、社会的役割もジェンダーも多様。さらに犬も猫もニワトリもいる。でそれぞれが、ある程度の余白を持って生きている。だから入り込む隙間がたくさんある感じ。そういう余白の大事さっていうのを本当に島に行って感じる。都会生活ではあまりにも余裕なく生きていたから、何かを受け入れるっていう隙間は一切なかったね。

志賀さん：地方でも、ない人はないよ。

茜さん：空間的にも、時間的にも、精神的にもね、本当に余力が一切なかった。パツパツだからさ、お互いがパツパツだったらさ助け合えんじゃん。あと、実際は余裕がある時でも、それを自然に誰かと分け合う環境がなかった。お金も時間も、自分のためにだけ使うのが当たり前だと思ってたところもあるね。都会人はお互いに、そうしましょう、っていう雰囲気があったよね。

佐藤：そういう意味でも、茜さんから見て、都会ではない島のコミュニティに自分が入って行くことでそこにどんな影響があったかって、わかりますか？

茜さん：うちだけである程度広いダイバーシティがあるから、マルチチャンネルみたいな感じはある。子ども、若者、年寄り、女、男、移住者、高学歴、低学(笑)・・・それだけチャンネルあったら、どこかに周波数合うかもなあって。主体性を持ってコミットできるコミュニティも、PTAから老人会まで、幅広い。秋祭りとかでも、父と弟は獅子舞をやって、私は子ども神輿やって、子どもらはそれに参加してって感じで色んな関わり方ができるよね。

久保田さん：それが怖い人もいるよね。そのダイバーシティがいきなりガンてくるのが。

佐藤：異物感。

久保田さん：当然ね。

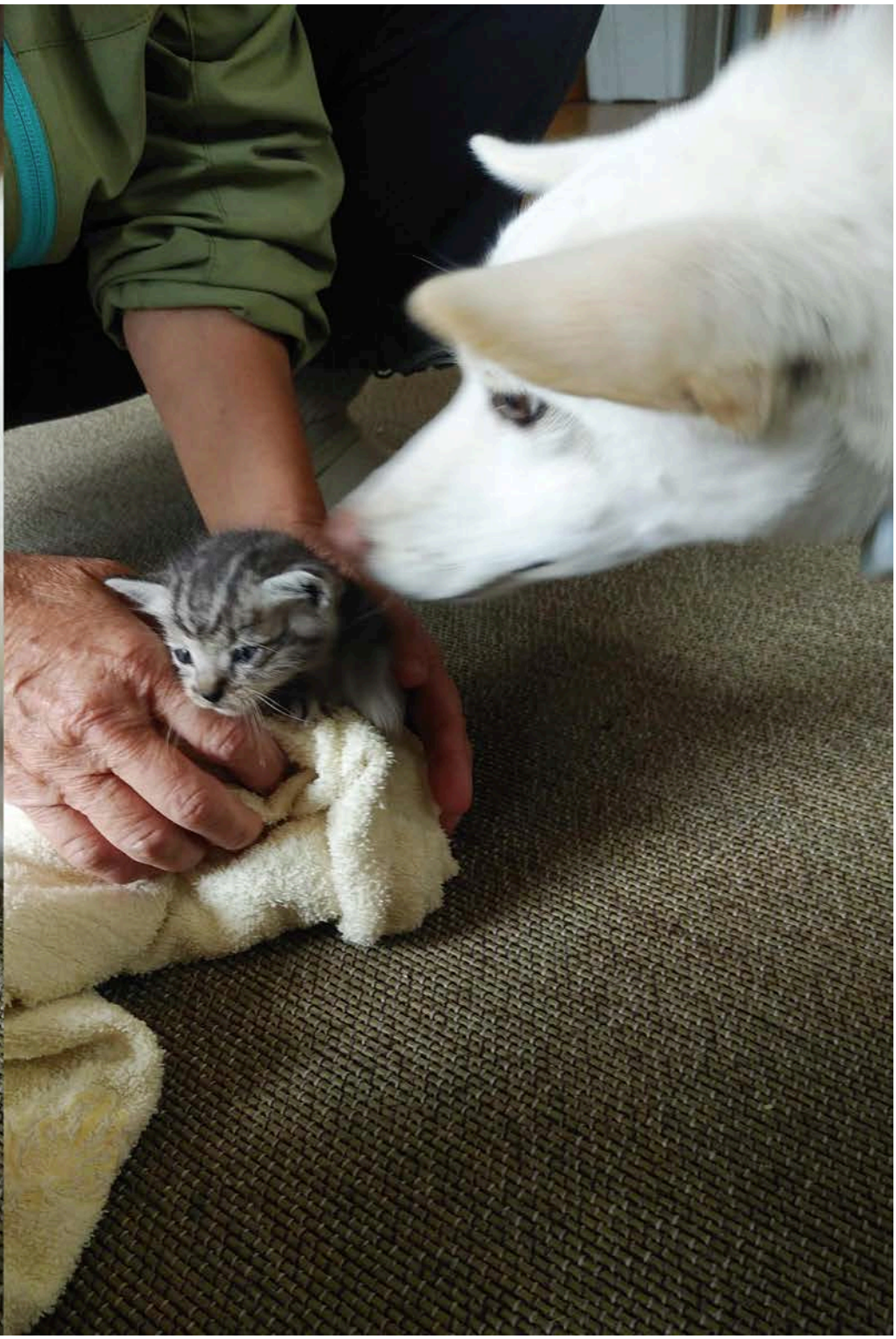
茜さん：私が核家族で移住したらまた全然違ったと思うし。実際に核家族で移住してきて、移住者だけで固まってる人たちもいるし。そこで固まっちゃうと、新しいチャンネルを持つのが難しかったり。それで居心地が良いなら全然いいんだけど。

佐藤：公共っていうことを考えるときに「行政主導の市民のために開いた、みんなのもの」っていう意味として捉えがちじゃない？けど実際だいたい閉じちゃってるよね。むしろコミュニティの中のある移住してきた異質でダイバーシティな家族の存在が公共的に機能しちゃうっていう。

茜さん：ある程度意識して、足りないチャンネルは増やすようにしてる。この人なんで入り込めんかなって思った時に、この人はこういう今あるチャンネルでは足りないのかもとか。自分とその人の中間にいるようなスタンスの人を引き込んだりとか。この人ハブになりそうだなとか。私は直接関われなくても、衛星を増やして全体がゆるく繋がる感じ。

佐藤：自分のチャンネルどんどん増やすの限界あるから。

茜さん：そうそうそう。



佐藤：チャンネルを持った人を入れるっていう、ある意味合理的だけど、いいですよ。

茜さん：例えば私の弟とか、それほどコミュニケーション得意じゃないけども、大工仕事っていう特技を身に付けたら、それが地域に生かされること沢山あるよね。技術がチャネルになる。手仕事、技術っていうのは田舎生活には欠かせないから。強いね。

佐藤：じゃ、あそこの兄ちゃんできるからちょっと借り出そうと、そういうところへのアウトソーシングが。

茜さん：アウトソーシングめちゃくちゃ大事です。若くて元気ってだけでめちゃくちゃ使えるもんね。高い木の枝を伐採するとか、そういうのも年寄りにはなかなかできないし、自分の子供にも遠方だから頼めない。だから本当にみんなの孫みたいな感じで可愛がってくれて。

志賀：いや〜いい話聞けて嬉しいな。今回さ、茜さんと話すの、普通に遠いからオンラインでやるか、なんて言ってたんだけど。

茜さん：丸慈が北海道行くの決まってたし、私も北海道旅して帰りに寄れたらいいかなって。最初は私1人で残りの子ども3人連れて行こうって思ってたんだけど、いざ出発しようと思ったら母親が「大変すぎるから下の二人は置いてけ」って言うてくれて、で長女と2人旅になった。

志賀：なんてフレキシブルなんだ。

茜さん：長女の慰安旅行になった。

志賀：毎日妹たちの世話沢山しているもんね、堃良、しばらくお母さんと水入らずでいいね。

茜さん：北海道で友達の旅人君を拾って3人旅したりね。ノラとずっと遊んでくれて、めちゃくちゃ助かった。子供組合のイベントで人がたくさん来る時も、基本私は自分の子供の面倒見たことない。人の子の面倒は見るけど、自分の子は私によりつかない。大人でも子どもでも、遊んでくれる人のところにパーっていく。そういう豊かな環境があるのがすごくありがたいし、子どももそういう場を自由に楽しめる感覚があって嬉しい。そういう場にいってもお母さんべったりみたいな子もいるからね。

久保田さん：美味しいもんいっぱい食べれるんだよね、人の親といたらさ。うちだと絶対ないしね。

茜さん：甘やかしてくれるしさ。

菊池：友達の家とか行くと、家じゃ食べたことのないようなもの食べれるとか、

茜さん：うちなんか特にそうだよ。

志賀：そのバラエティ豊かなところに子供が触れるのはすごいよね、一対一は絶対煮詰まるからさ。

茜さん：里子預かっててもそう。家ではすごい好き放題するようなやつでも、うちだとめっちゃ怒られたり。逆に自分の家では怒られることでも、うちでは好きにやれーってこともあるし。子どもも、多様な価値観に触れて学ぶことが多いよね。

子どもが行ってるボーイスカウトの今西隊長っていうのも、最高なんだよ。

志賀：写真の丸慈がふるえ上ってる。笑

清水：チル爺でしょチル爺、「CHILL」っていうキャップかぶってる。笑

志賀：ボーイスカウトって元は軍隊？

茜さん：元軍人が作ったけど、軍隊とは違うかな。隊長は色んなポジションがあるんだけど、今西隊長だけは別格なの。チルおじいちゃん別格。

志賀：子供がついていこうと思う雰囲気の人なの？

茜さん：全然。小さい子どもは恐いって泣き出すし、大きくなるとうるさいな〜みたいな。いつも今西隊長の武勇伝を聞かされんだけど、繊維業で景気が良かった頃は儲けた



のかな。お金の話大好きだもんね。今西隊長がバリバリ現役の頃は、ボーイスカウトで川を挟んでロケット花火打ち合うとかね、それボーイスカウトでやる??みたいな。

志賀：じゃあボーイスカウトってさ、学校教育みたいなみたいな感じじゃないんだね。

茜さん：全然違う。

志賀：それぞれなんだ、地域で。

茜さん：それぞれだと思うけど、その中でも今西隊長は異質だと思う。丸が参加してすぐの頃に、山の野営地で遊びますって時に、竹と木で作ったポーガンみたいなを持ってきてたの。五寸釘の先を尖らせて溶接した手裏剣とか。それ完全に人殺せますやんってやつを、ちびっこ達に配って、畳に向かって投げて刺す遊び。万が一人に当たったら大怪我だよ。入隊式の時は、お前は今日から俺の子分だから、今日から何でも言うこと聞くんぞ!って脅すの、笑

志賀：ボーイスカウトの概念が今すごい変わった!

茜さん：そうでしょ、昔は竹刀を振り回してたらしいけど、今はもうだいぶ丸くなったみたい。あと、小さい女の子にはデレデレなの。ベタベタに可愛がってて、ボーイスカウト行く度に大量のプレゼントくれるっていう。笑

志賀：変な人の存在って、すごく大事だよな。

茜さん：めっちゃ大事、こういうじーさんをあしらう技術とか、気に入られる技術とか。

志賀：わはは、だってさー、この爺さんからしたら子分増え放題っていうことですよ。楽しすぎるでしょ。お爺さん一番楽しいよね。

茜さん：もう今日で引退だ、次は来ねえぞって言って、最後の記念撮影とかするんだけど、また来る。私は今西隊長がいなくなったら悲しすぎるから、これからもずっと続けて欲しい。地元の集落でも恐れられてるみたい、本人談だけど。でもそういう厄介さがね、いいよね本当に。ただ厄介なだけじゃなくて、子ども達に対する大きな愛がある。そのためには手段も労力も選ばない。そういう、家にいないタイプの人と出会える多様性も、外と繋がることで増やしていける。地元に残って役場務めしてますっていうタイプの人たちにとっても、やっぱり私たちは異質だから。お互いに面白がれたらいいなって思ってる。私がそっち側の人間になってしまったら、貴重な多様性が減ってしまうから。たまに、内部からイノベーション起こしちゃうようなカリスマ行政マンとかいるし、メディアはもてはやしがちだけど。もちろんそういうスーパーマンみたいな人がいるのは素晴らしいけど、ただそれを待ち望んでもダメだなって感じる。

志賀：行政の仕組みをっていうことね。でもその関わり方が要は能動的だから、どっちかっていうとハックしてるような雰囲気を楽しめるっていう術だね。

茜さん：だからPTAとかも完全にハックしてる感じにいる。そういう意味では、都会でサラリーマンやってる時も、水商売やってる時も、アート業界にいた時も、どれも染まり切ることができなくて、ハックしてる(されてる?)感覚だったのかも。

志賀：あかねちゃんPTAの会長なんだけど、いろいろ炎上してお母さんがたに囲まれて。

茜さん：そう、揉める時はめっちゃ揉める、でも、直接意見を言ってきたら最高だなって思う、私は。

志賀：あれ、それ、なんで炎上したんだっけ?卒業式がつまらないって言ったんか?

茜さん：そう、私がSNSに「卒業式がロボットみたいでつまらない」って書いたら、教育委員会まで苦情があって、校長室に呼び出されるっていうね。ちょっと面白いことになった。

志賀：でもさ、小学校に入った瞬間、やっぱり軍隊式になるから全然面白くなくて、いきなり整列させられて、直立

不動で、起立礼で、義務教育って、一瞬で硬こんなに硬くなるのか！ってびっくりしたよ。

茜さん：授業参観行った？

志賀：行った。

茜さん：1ミリも変わってないでしょ、自分たちの頃と。

佐藤：ほんと変わってない、びっくりした。

茜さん：びっくりしたよね。あれ？何十年か経ったよね？って。しかも、昔よりルールがすごく増えている。え、こんなことまでルールで決まってるのって驚くことが多いよ。

志賀：PTAのことだけど、世の中の親の大半は、忙しくて会長になりたくない、PTAとは関わりを持ちたくないのが主流で、そこから避けて避けてだから、変わってない、変えようって、それやっぱ言えないのよね。

茜さん：でも一方で、その自分の政治力のなさみたいなことも痛感したし、自分の中の過信とか奢りも自覚させられた。自分がいかに都会に毒された頭でっかちで、リベラルクソ野郎かってことを学んだのが一番大きな収穫だったな。

志賀：でも、政治力なくても子供を見て、肌感覚信じているじゃない？お母さんたちの自信のなさみたいなのがさ、すごい揺らいでるっていうのわかる。私もそうだけど、やっぱそこで何か、いやいや自分の頭で考えて判断してこうよっていうのが、はっきり持てたら、私もやっぱりもうちょっと空気に惑わされないでいれるのかもな。

茜さん：もうそれだけだよな、やっぱ当事者同士で、とことん自分の頭で考えて、自分の言葉で話すこと。間違ってもいいし、ぶつかってもいい。

志賀：うん。ちょっとだんだん締めに入りますが、茜さんが、人間で「生きてる実感」のために生きてる部分もあるって。

茜さん：うん、痛みも苦しみも、生きているっていう実感に繋がることだから。

志賀：そうだね、だから不感症みたいな状況っていうのは非常に苦しいってことよね。

茜さん：人類史の中でさ、せいぜいここ100年ぐらいの話だとおもうよ、そんな不感症になったのは。もっと最近かも。暇が嫌だとかね。人類史の中では、生きるか死ぬかみたいなギリギリの生活がずっと続いたわけだから。だからそういう、生きるか死ぬかみたいな感覚を失ったっていうことが、いかに大きいかっていうことなの。

志賀：近代の果てに来てね、遠いとこまで来たね。

茜さん：世も末です。

志賀：昨日さ、茜さんと晩飯の時に「世も末」って言いすぎて、夜寝る時に椎太に「おかあちゃん相談があるんだけど」、布団の中で真剣に言われて「世も末ってなに」って、相談されたよ。笑

茜さん：私はこのまま人類は終焉を迎えるのだろうか、と思っているんだけど、でもそれをすごく憂いて、今子供を作るべきじゃないっていう人まで出てきてるよね。でも、考えたら終焉ってかなり面白いと思う。人類がこれまで到達したことのない、終焉を見る、私は今それがすごくドラマチックだなと思ってる。人類ってこうやって終わるんだっていう。

志賀：それは・・・第二次世界大戦で何万人って死んだレイテ島のような話ではない・・・よね？レイテ島で起こった、残虐な殺し合いの末、約40万人が亡くなって、最後は、人の肉を食べざるを得ない状況にまで追い込まれる、みたいな、そういうことですか？

茜さん：そういう事もあると思うけど、もっと予想外な終わり方なんじゃないかと思う。

佐藤：色々僕らは未来を予測しようとするけど、絶対変な結末になるよね。

茜さん：ここまで人類が培ってきた理性"みたいなもの"がどこまで崩壊するのか、どこから新しい形で発動するのか。誰も予想つかないでしょ。私マッカーシーのディストピア的な世界観が大好きだから、その話と繋がってくるんだよね。

志賀：その本今持ってきてもらってもいいかな。なんか茜ちゃん到着したらハイエースの前に「越境」って書いてあるマッカーシーの本が。笑

茜さん：コーマック・マッカーシーっていうアメリカの作家で、ピューリッツァー賞も取ってる人で、日本ではあまり人気ない。映画化もたくさんされて、マット・デイモンの「すべての美しい馬」とか、ヴィゴ・モーテンセンの「ザ・ロード」とか。一番有名なのはコーエン兄弟の「ノーカントリー」かな。映画化されてる本も面白いんだけど、映画化されてないやつもめちゃくちゃいい。マッカーシーはこれまで10冊くらいしか本書いてないんだけど、もう年だからこのまま死ぬと思う。その作家の著作が全部好きっていうの、マッカーシーぐらいかもしれないね。

志賀：それは、茜ちゃんが中央線で育った場所に小劇場があったとか、そういう背景は影響してるのかな。

茜さん：あ、全然入ってない。そういうサブカル的な要素は全くないかな。

志賀：そうなんだ、これいつから読み始めたの？

茜さん：子供できてから。本当に最近だよ。最初は「ノーカントリー」を映画で見て、面白い！と思って、原作読もうって思ったのが最初。そしたら原作もめちゃくちゃ面白くて。文体がすごく独特なの。句読点とか鍵カッコがなくて、ワンセンテンスがやたら長い。心情描写が一切なくて、抑揚がなく淡々と情景描写が続くからすごく読みにくい。でもそこにハマると、その世界に引き込まれていく。この人の作品、メキシコが出てくるよ。「越境」も、アメリカからメキシコの国境を越える話。アメリカ南部の牧場の15歳ぐらいの少年が、父親が畏で捕まえたメスの狼を故郷のメキシコに返すために1人で国境を越えるの。そこから始まる、不条理で、壮大な旅。寓話的な部分があったり、哲学的な問いがあったりするんだけど、とにかく自然の描写が素晴らしい。生と死、宇宙観。

久保田さん：ひたすら暴力なんだよね。

茜さん：「越境」にも残忍な死がたくさん出てくるけど、「ブラッドメリディアン」という小説があって、そっち方がさらに不条理。舞台はアメリカ開拓時代。14歳の家出少年が、判事っていう人に出会って、インディアン討伐隊に加わる。そこから壮絶で残忍な虐殺に巻き込まれていくという話。判事っていう人がやたらと聡明で博識で哲学的

で、旅の途中にある遺跡を記録したりしてるんだけど、その一方で恐ろしく残忍な殺戮を繰り返すっていう、見た目もめっちゃ怖くて、2メートル以上ある巨漢で、体毛がまったくないっていう。死の神、みたいなキャラクター。

「人間が戦争のことをどう考えようと関係ない、と判事は言った。戦争はなくならないんだ。石のことをどう考えるかというのと同じだ。戦争はいつだってこの地上にあった。人間が登場する前から戦争は人間を待っていた。最高の職業が最高のやり手を待っていたんだ。今までもそうだったしこれからもそうだろう。それ以外にはあり得ない。」

殺戮の描写があまりにも残忍なんだけど、それでいて心理的にジワジワするような感じがなくて、数行で面白いくらいあつという間に死体の山ができる。読み終わった時の読了感が「死体が山になってる」イメージだったもん。神だとか救いだとか、もうそんな次元の話じゃなくて、人間と戦争っていうのは宇宙的に一体である的な。マッカーシーもそういう発言して炎上したりしてる。世界がいつか平和になって、殺人とかなくなるみたいなそんなこと言ってる奴ら全員死ぬみたいな、笑 だもんだから、小説もだいたいそんな感じなんだけど。でもその暴力の中にある、その人の性というか、その血みどろな崇高さというか。そうい



越境
The Crossing
コーマック・マッカーシー 黒原研行 訳
Cormac McCarthy
早川書房

う人間の血生臭い凄みと、壮大な自然の対比がすごく美しく、すべてが宇宙的に繋がっている感じさせられる。自然も不条理だし、人間も残虐だけど、その全てが美しい。

佐藤：終末論的な、なんだろう、そういうビジョンみたいなのは、なんとなく分かる。今はどちらかというと、まだそこまでいってない世界で、いわゆる感情的な議論が多い気がする。もっと自然災害なり食糧問題とかが突きつけられたら感情論みたいな一切なくなるんじゃない。それも恐ろしいんだけど、今は安全な所で眺めてるから楽しめてるけど、自分がもしそこにいたらどういった状況になるかとかって思っただけ。また違うフェーズになった時にね。

志賀：でも世界はずっとそうだったわけでしょ、逆にずっとそうだったんだけど、だからそのディストピアの中の自由に対するノスタルジーは絶対あるだろうし、でも、現実にはそうならないように必死に、やっぱり多くの人間が戦争回避しようとしたりする力は強く働いてると思う。

佐藤：ノスタルジーっていうのは野生の？

志賀：失われた野生が働き始めるっていう、そういうものに対するノスタルジーをまんま取り戻すっていうことをすると悲劇になるような気がするから、その、せつかく時間が経ったんだから、それなりの何かをしたい、それなり

の・・・何て言うんだろう、向き合い方をしたくてもがいているよね。

茜さん：そのSDGsやらも、そのうちの一つなのか。

佐藤：新しい産業の形だもんね。

茜さん：受け皿を新たに作たっていうだけで。

志賀：情景として私らの体の中に「越境」の世界感に触れるような、そんなものがかすかに残っているとして、どういうふうこれから生きて行けばいいか、SDGsで盛り上げて行くのではなく、サイズダウンしないと、そもそもを。だって、あのノスタルジーより激しい世界がくるわけでしょ、昔に戻るわけではなくて、これが本当にノスタルジーになってしまうほどの、悲劇が起こるだろうって。

佐藤：さらなる戦争とか。

志賀：戦争の記憶も膨大に、アーカイブとして残されてるから、もっとねじれた暴力がくる。

茜さん：同じ戦争はもう起きない・・・？

志賀：同じ戦争は起きない、いわゆる目に見えないところで大量の人が静かに死んで閉まってるし、同じ戦争も繰り返されるけど、違う形の殺し合いが上乗せされていくんだ

ね、きつと。だから覚悟してる。コロナ禍の日本の自殺率はすごく高くなってしまった。だから、目に見えない違和感に対する肉体と肌感覚に対して、工夫ができたらいいなと思うんだけど・・・うーん、「豊かさ」の意味すらわからなくなっているかもしれない、多分「死」を天秤にかけた時にしか、かけがえのないものが何かわからなくなってしまうっていうのもあるのかもしれない。

茜さん：極端な話、丸慈が自転車旅の間に死んでも仕方ない。それは覚悟だよ。本人はそこまで覚悟してないと思うけど。でも親の私としては、そこまで覚悟しないと旅には出せない。実際死んだらね、当然後悔はすると思うよ。死ぬほど後悔する。でも後悔することも含めて、親の責務だと思えるかどうかだし、それは人類の規模でもそうなんだと思う。

志賀：小野寺さんという、牡鹿半島の制作でお世話になっている鹿猟師の方がいて、今クマが街に頻繁に出て来るようになったから大変っていう状況があるけど、でも、もし自分の子が襲われて喰われても騒ぐなよって。だって当然じゃん、そりゃ襲うでしょうって。その辺に対しての人間の反応は、人間中心すぎてやっぱりおかしいんだよって。だから、一人の人間が生まれ育つ際の避けようもないリスクにきおつけながらも、本当の意味での「豊かさ」を失わないように、危険も受け入れていくっていう親の責任みたいなものを、そもそも考えようよ、っていうのを茜さんにすごく感じる。

茜さん：子供が野生動物に襲われて食われるかもしれないというのを覚悟した上で、研ぎ澄まさないといけない感覚があるよね。全然違うものでしょ、回避する感覚と、覚悟したその上で何ができて感覚って全く違うものだから。回避するっていう感覚だけで生きてると、覚悟の上になり立つ世界を想像することができない。

志賀：最初から回避しようと思って部屋に閉じ込めるっていうことではなくって、そういうことがあるっていう上での感覚と想像力か。

茜さん：それがあっていう上で教えなきゃいけないことは何か、自分が教えられることとか伝授できることがあるとしたら何かっていう。回避だけじゃない別のこと。

志賀：今すごく、腑に落ちた。それに迷ってる人いっぱいいると思う。要は、子供が旅の途中で死んだとしても、それを含めてのことなんだっていうのが、どうやったって理解できないし、それを許せない、絶対にあり得ない、ダメでしょ・・・っていうので炎上してしまうんだね。

茜さん：でも、そういう覚悟っていうのも、逆にすごく現代的なのかなと思うよ。昔の人はそんな覚悟をいちいちしてないのかも。覚悟した上で一歩踏み出すより前に、目の前にただ起こってしまうことがある。回避する方法がないから、神に祈るしかないわけで。それは自分の自由選択とは関係なく自然に起こることであって、その悲しみも含め

てみんなで共有していく、不条理の共有感覚みたいなのがあったんじゃないかな。現代は自由選択と自己責任がベースにあるから、自分から意識してあえて想像しようとしないと得られない。

志賀：この間ね、大雨が降った時に、ある自閉症の男の子が雨の中いなくなってしまった、と地元の友人がメールで知らせてくれた。で、その子は発話ができないのだけど、雨が大好きで、雨が降ると、施設から飛び出して雨に戯れて遊んでるっていうのを田んぼの中で保護されたこともあったらしくて。それでね、ああ、きっと現場は大混乱で、責任の問題で施設の人は張り裂けちゃうような心境だろうし、でも、誰も、誰一人として、この事に関しては悪くないはずで、いや、むしろ雨が大好きで、雨が降ると外に飛び出していくっていう、なんと豊かな感覚がその子にはあったんだろうって、むちゃくちゃに胸が苦しくなった。雨が大好きで外に飛び出していく感性は否定できないし、止めようもないものなんだって、ものすごくハッとしたの。泣けるほど豊かなことなんだって。すごく込み上げてくるものがあつた。それでね、4日後に遺体が見つかったと聞いた。行方不明の時にね、皆ができることは励まし合ってたすら探す。それで、雨が大好きで飛びだしていった、その子を大事に想うことが、何よりも大事だって思った。

茜さん：いやわかるよ、縛り付けておくしかないもんね。こういうことが起きないようにするには。

志賀：だから、この子が雨が大好きで飛び出したこと、それで私たちが気づかされることってすごくある。どれほどに大事なことを、私らは失っているかっていうことと、だいたい雨に濡れたらダメって言われ続けて、子供の感覚は淘汰されていっちゃう。けどあの子は違った。常識も法律も、それは自閉症だからという理由ではなくて、彼は影響されないという、ものすごく稀有な存在なんだって。

茜さん：その子の世界が何で形成されているかなんて、その子にしか分からないからね。

志賀：それを貫いた彼は、とてつもなく豊かで、切実なもの私たちに感じさせた。途方も無いような気持ちがこみ上げてくるんだけどね。

茜さん：私はそれ、山登ってすごい感じたの。山登るってそもそも意味ないじゃん、何の生産性もないわけで。去年、石鎚山に登ったときにさ、石鎚山って山頂がすごい切り立ってるわけ。山小屋がある頂上から、更に両脇が崖になってる天狗岳ってとこに登れるんだけど、ちょっと足踏み外したら滑落して死ぬようなとこなの。で、そこに赤いキャミソールワンピ姿で登ってるお姉ちゃんいたわけ。一歩間違えたら死ぬところにね、キャミソールワンピで登って、もし滑落して死んでも、それはその人の選択として尊重されるっていうことにすごい感動した。何もかもシステム化されて効率化されて、ルールばかりの現代社会の中に残されている、豊かさを見た気がした。

佐藤：どこの山？

茜さん：石鎚山、西日本で一番高い山です。

志賀：キャミワンピで登ってもよくない？っていう。笑

茜さん：死ぬのも自由っていうね。最近、中国人観光客が軽装で富士山に登って、遭難したら超迷惑だみたいな話もあるよね。社会人としての責任があるから、ちゃんとした装備でいくのが大人の責任だろうという声も理解できるんだけど、でも私はそれも分かった上で行って、滑落して死ぬかもしれないところに自分の足で行くっていう、もう死ぬことも織り込み済みで行くっていう尊厳ね。死ぬことも生きることも、尊厳があるよなっていう。

最近、全てが責任論で語られてしまうし、やっぱそこに賛同する人が、ネットとか特に多いよね。システムの部品である前に人間って、藤原新也じゃないけどさ、犬に食われるくらい自由なんだよ本当は。

志賀：いやそうかもしれない。例えば、自然の世界とか動物の世界はもっと厳格なルールがあるじゃない。それに絶対に逆らえないものすごい自然の摂理と、法則がある。要はその自由っていうものと、感情っていうものが人間にあるっていうことは、多分何かこう、何かに使えるっていうからだよねきっと。

茜さん：キャミワンピで天狗岳に登るお姉さんが教えてくれたこと、がとて大きいなと思った。越境の主人公も、狼を連れてメキシコに行くっていう、何の意味もないのにやるっていうことの美しさみたいなことを教えてくれた。その崇高さというか、理屈を超えているが故の揺るぎない崇高さみたいなことを、やっぱり失いたくないと思った。自分がすごい理屈人間だから。

志賀：誰かの感情を、喚起する・・・ことがあるってことね。雨の中、飛び出して行ったあの子もそうだよ。自然に還ったような、どう彼の死を考えるかは重要で、何が私達を喚起してくるかっていうことそのもので。もちろん、喚起には、距離感が必要になってくるけど。

茜さん：その感覚は、やっぱ自分が持ち続けられるかっていうところで常に試されてるなって思うよ。

志賀：それを考えると、やっぱり、日本は、丸慈と友達ふたりが、1ヶ月自転車で旅できるんだもん、すごいよね。

茜さん：今回の旅は本人の意思を遥かに超えて、他者との関わりの中で旅が思わぬ方向に膨らんでいったんだけど。今回は、小学6年生なりのピュアな感覚だけで前に進んで、手に負えない部分は程よくユルッとサポートが受けられるっていう、めちゃくちゃ豊かな環境だったと思う。もっと成長したら、もっとハードル高いところにも行けるだろうと思うんだけど、でもそこに到達するまでの最初のステ

ップを、周囲に見守られながらしっかり踏めるってのは豊かだよ。私はあまりそういう経験をせずに大人になってしまって、身体性とか感覚より先に頭で考えてしまうようになった。でもまだ言語化できない年齢だからこそ感じられる事は絶対ある。右脳と左脳があるけど、やっぱりその右脳の世界をもっと豊かにしてほしい。左脳は後からついてくる。左脳がすごい損傷を受けてたりすると、右脳だけの世界になるらしいんだけど、右脳だけの世界って時間の前後感覚がないんだって。今、しかない、今コッっていう感覚、それってすごく野生に近いんだよ。で、右脳だけの世界は多幸感に溢れているらしい。生きてるって感覚が全てなのかな。これまで人類は左脳に頼りすぎてきたからさ、そこのバランスを取り戻したいね。

志賀：いい最後だなと思うんだけど、久保田さんはそんな茜さんをずっと見ていて、どうですか？

茜さん：なんか私が島に行って変わったなみたいなことってある？

久保田さん：基本変わらないけど、子供を引き取ったり、育てたりっていう側面とテロを仕方ないこととして容認するような側面と、そういう一見するとアンビバレントに思えるところは健在で笑。昔から、多分ある種のマッカーシー的な部分を多分背負ってたんだと思うんだけど、当時はそこがわかってなくて、しょっちゅう大げんかしてたね。

志賀：倫理観。

久保田さん：倫理観。茜ちゃんは、自分の身近なところって
いうよりも、もっと俯瞰した「人類」みたいなところで話
すから、完全に考え方が食い違ってしまって。

茜さん：だって仲良くしたら戦争なくなるみたいなこと言
うんだもん。そういう人大っ嫌い。

久保田さん：僕からすると「テロ仕方ない」とか、どうい
うことだ、みたいな。

志賀：でも 久保田さんは、それぐらい柔らかくものを考
えるよね。

茜さん：柔らかいってというか、お育ちがいい。恵まれて
る。わたしもそうだけど。育ちの良さがナイーブさに繋が
ってる。

志賀：夫婦喧嘩がテロを容認するかどうかって。笑 でも根
本的な価値観のすり合わせをしてるってことでしょ。それ
をおろそかにすると本当に後悔する、本当にそう思う、そ
この一番大事なところっていうのがどうかっていうのを確
認し合うのが怖くなったりとかもやっぱり何かできなくなっ
たりとか、要は本気で話し合えるかどうかってことだけ
ど、本当はそれないがしろにしてこなかったっていうのは、
今に生きてるんだろうし、そっから変わるっていうこ

とがどれだけあるかっていうことも感じれるわけだし、そ
れがあれば、だからそれを闇雲にしないっていうのは大事
だね。

茜さん：世間がコロナで一斉休校になった時にね、何がき
っかけだったか忘れたけど、3,4時間ぐらい電話で大喧嘩し
てたね。お互いに平行線で、「全然納得できない」みたい
な。

久保田さん：そうだっけ。

茜さん：そうそう。

佐藤：休校派かーってということ？

茜さん：違う、たまたまそのタイミングで、私の中ですご
い世界観が変わったんだよね。里親になったこととか、コ
ロナのこともあったし、そういう不条理な状況が脳内で処
理し切れなくなって、これは一体どういうことか・・・っ
て考えまくってたら、考えすぎて思考が1回転半くらいし
て、誰も間違っていないし、誰も悪くないっていう境地に達
した。殺人鬼だろうが、子供を虐待する親だろうが、そこ
に悪い人なんか1人もいないっていう、極論になったんだ
よね、なぜか。

久保田さん：僕その辺ね、政治家とか本当に、悪いことし
てる人はムカついてしまうのよ。

茜さん：そう、政治論になったんだよね、世の中には人を
陥れる悪い政治家がいるみたいな、そう言ってきたから、
そんな分かりやすく悪い奴なんていねーって。

悪い奴なんか世の中に一人も存在しないって罵倒しあうっ
ていう。笑

志賀：それをできるかどうかって、生活がそこに入り込む
とき、すべてぐちゃぐちゃになっていくからさ、おかしくな
ってくる。でも、子育てのことがある程度、茜ちゃんに
任して、それはもうあれでしょ、離れてるっていう。

久保田さん：その距離、届かなさがやっぱりちょっとおか
しいから、このあいだ大阪から島に住所を移したの。不自
然だって思っただけ。だからなるべくぐちゃぐちゃにならない
ようにしないと。笑 いま、茜ちゃんと弟が大工仕事でリ
ノベしてくれてる。だから、これから島に結構いるよ。

志賀：いいね。

茜さん：そうね。もうネットがあつてグローバルですか
ら。笑 どこにいても仕事できるしね。

志賀：最後菊池くんも、質問あれば是非。

菊池：いっぱいありすぎるけど。最初は里親の具体的な仕
組み自体にかなり興味があったんだけど、話を聞いている
うちに皮膚感覚としては確かに誰の子供でも育てようと

思えば普通に育てられるんだみたいなところに希望を感じて、家族のあり方とかも皮膚感的なところではもうちょっと柔軟にできそうなのに、いろんな制度とかで難しい部分があることを改めて感じて。ということは逆に制度や社会がもう少し変わっていけば、育てるってことの本質的な側面とか感覚に近い暮らし方が身近になるだろうと思う一方で、でもそういう動きが始まるのはやっぱり個人からというジレンマというか、難しさがあるなと。

茜さん：現代人って制度側に皮膚感覚を合わせることに慣れすぎちゃってるから、そうじゃなくて、皮膚感覚をその制度を越えるぐらいまで高めないとその先の本質が見えない。

清水：私もメキシコに来て感じるのが、メキシコって自己判断に任せられることがすごく多いんです。だから地震とか激しいデモがあったときとか、町中の通りのガラスとかが全部割れたりとかして、足場がガラスでバリバリになっていたり、地震のあと、半壊してる建物とかレストランとかでも営業を続けていたりするんです。「自分たちは営業するっていう判断しましたので、その上で、ここに入るかどうかは、あなたたちが決めてください」みたいな感じなんです。だから何か起こるたびに、判断を迫られる。でも、「自己判断」だからといって、「自己責任」ではないんです。自分で判断しなければならいけれど、それになにか起こってしまったときに、道行く人とか誰かが助けてくれるんです。交通事故が起きたときの、対応が日本と全

く違うなと思って。警察も救急車も保険会社も登場しないんですよ。そこに居合わせた人たちや当事者同士の話し合いで瞬間に解決されていくのを何度か見て、びっくりして。そのとき、私は日本の制度に対して文句も言いつつ、どこか依存しているところもあるから、システムや専門家まかせで自分で判断できなくなってしまうんだらうなと、メキシコでは日々、思い知らされるんですよ。茜さんがざっきその余白を持つことについて話してたけど、それぞれの人が余白持つることって本当に大事だなってメキシコでの生活でも痛感します。急になにか事故や事件が起こったときに、現場で臨機応変に対応ができるのも、それぞれの人が余白を持っているからなんですよ。

茜さん：本当にそう、日本だと、大体が、余白ないから構ってられないでしょう。

清水：みんな通り過ぎてくじゃないですか、厄介ごとに絡まれたくないとか自分のスケジュールだけは完遂するっていうのにいっぱいいっぱいになってるから。自分も日本にいたときはそうだったし。メキシコではボロボロの中古車に乗っている人が大半で、エンジンの不具合で止まる車とか多くて、そしたら道行く人がいろんなところから集まってきて押して、エンジンかけるの手伝うみたいなことが日常茶飯事なんです。経済的には日本より貧しいはずなんですけど、いざ何か困り事が起こったときに絶対みんな手を差し伸べる。何かそういう余白はみんな持っているんですよ。あと茜さんが以前、話していたことだと思うんですけど、

「私は友達にお世話になってるところを子供に見せるようにしている」って。例えば、ホテルに泊まったりするのは簡単なんだけどそうじゃなくて友達の家泊めてもらってそこでその人にお世話になったっていうことを、自分の子供たちに見せておくこととか。私は「自分が好きなこととしていいけど誰にも迷惑かけるな」みたいなことを言われて育ってきたから、それが今でもやっぱ何か自分の中で呪縛としてあります。

でも、メキシコで贈与論を研究してる人がいて、その人が言っていたのが、「自分が誰かの世話になったっていうことを自覚できてないと、次の人に何かを渡せない」って言って。お世話になったっていうこと自体に気づく感性がないと贈与は成り立たなくて、今もメキシコの田舎の村とかで贈与が長年成り立ってるって言われてるのは1人1人が誰々にあのお世話になったっていう自覚を結構きっちり持つてるから成り立ってるみたいな話を聞いて、茜さんが子どもたちに教えてることに近いのかあと。

茜さん：日本って基本的に人様に迷惑かけずに、自活できて余裕が生まれて、それから社会のために貢献しようみたいな、そういう感じでしょう。でも私は誰かに迷惑かけるのが先だろうって思う。人の世話になって初めて、自分も人の世話ができる。今日は世話になったけど、明日は誰かの役に立つかもとか、その逆とか、そういう持ちつ持たれつを行き来する感覚が希薄だなーと。特に都会は。

清水：なんか余白とかってというのは別にお金どうこうじゃなくて、どれくらい何かあったときにさせる技術があるかということでもあると思うんですよ。時間以外にも、この技術をその場で提供できるみたいな。だから、何かその辺のことをメキシコでよく考えるし試されるところで。

茜さん：「モモ」だって話を聞くだけだけど、それだけでも誰かを助けて。障害者の人だって、いるだけで社会に貢献してるっていう、そういう感覚を全員が持つてるかっていうね。そういう感覚にかかっているから、その皮膚感覚をね、どういうふうにして養うかっていうのは、かなり真剣に自覚してなおかつ共有しないと、制度的なとこまで落とし込むのは本当に難しいから。そこはすごく自覚してようと、意識してるし、子ども達にもどうにか伝えたいと思ってる。人の助け合いとか人情が残ってるところと比べて、東京は助け合いの精神がないから冷たいとか、そういうのも全然違うなと思ってる。ある意味、都市は制度的に成熟したから、そういう助け合いみたいな非効率なことを意図的に淘汰していったわけだし。だからそれを単純に、どっちがいい人で、どっちが冷たいとか、そういう論調になるのも絶対違うし。途上国とか不安定な地域は、成熟していないからこそ、そういう無駄が多い非効率なシステムが成り立ってるわけで。先進国はそういう諸問題をシステムとかお金を介して解決できるようになったってことで、豊かなことでもあるから。でもそのシステムもまた疲弊してる部分もあって、さらに次のステップを模索し始めている人もいるね。……話は続く……END

